

提出日： 2025 年 7 月 1 日

研究促進期間制度 研究実績報告書

所属学部・研究科	身分	氏名
文学部	教授	山崎圭

研究期間	以下1～4より、取得した研究機関を選択し、該当番号を右欄にご記入ください。	
	1. 2024年4月 1日 ～ 2025年3月31日	1
	2. 2024年9月 1日 ～ 2025年8月31日	
	3. 2024年4月 1日 ～ 2024年9月20日	
	4. 2024年9月21日 ～ 2025年3月31日	
活動報告	研究期間中に実施した研究活動を具体的にご記入ください。 海外活動補助費を受給した方は、海外活動の内容が分かるようにご記入ください。	
	近世の千曲川水害に係る史料を、長野県立歴史館・長野市立博物館・中野市立博物館、その他個人所蔵者宅等で調査収集し、近世から近代初頭にかけて地域社会に生きる人びとがどのように水害と向き合ったのか、また、その向き合い方が近世から近代にかけてどのように変化したのかについて、幕府・藩・代官・豪農・村・小百姓等、地域社会を構成する各層の動向に注目しながら検討した。なお、分析対象地が 2019 年千曲川水害の被災地であることから、研究には救出された被災史料を多く利用し、また地元の方々から多くの御教示をいただいた。	
得られた研究成果について	上記の研究活動の結果、得られた研究成果についてご記入ください。	
	研究発表としては、歴史的史料活用研究会の主催により 2024 年 11 月 3 日に妙笑寺（長野市長沼）で講演「江戸時代の千曲川沿いの新田開発と水害」を実施し、研究成果の地域還元を図った。同年 12 月 7 日には近世史セミナー（信濃史学会等共催、於長野県立歴史館）で研究発表「近世の千曲川水害と流域村々―18 世紀の延徳耕地の治水をめぐる政治―」を行った。 論文としては、拙稿「近世水害村の存続条件―赤沼河原新田と千曲川―」（『中央大学文学部紀要・史学』70 号、2025 年）を発表し、近年のレジリエンス論を踏まえて、水害常襲地域に位置する川沿いの新田で年貢量が激減する程の被害をくり返し受ける中で、どのように村や家の存続が図られていたのかを明らかにした。	
今後の計画について	得られた成果を踏まえ、今後どのように研究を発展させる計画か、ご記入ください。	
	研究促進期間が科研費の最終年度にあたっていたので、これまでの研究成果を著書にまとめようと努めたが（仮題『近世幕領の豪農・村・水害』）、期間内に原稿を出版社に提出することができなかった。今は近日中に書き上げるべく取り組んでいるところである。また、研究促進期間中に千曲川流域で多くの史料を撮影することができたので、それをもとに、千曲川の変遷と村境の変化をめぐる兩岸の相論、その相論の裁定のしかたをめぐる近世と近代の違いなどの諸テーマについて論文を執筆したい。	